

解答と配点

100 ①								問題番号 (配点)	正答	配点
8	7	6	5	4	3	2	1			
(d)	(b)	(c)	(b)	(b)	(b)	(c)	(b)			
17	17	9	9	13	9	13	13			

① 解説

1 文章の冒頭から、「人工」と「自然」の明確な対比で議論が展開している。②段落において、「人工物」は、「作った人の意図があり、論理がある」と説明され、「自然」は、「人間が意図して設計したものではない」「(完全には)理解できず、予測できず、統御できない」と説明されている。

また、「われわれ」の生きる「現代」とは「ほとんど人工社会であり、徹底的に人工化を目指している」社会であり、その中に生きる「われわれ」は「もっぱら人工物にばかり囲まれて暮らしている」(③段落)状況にある。そのような社会で、「自然の扱い方」がわからなくなっている原因の核心部が空欄となつて問われている。

選択肢はいずれも部分的に抜き出されているので、その前後を確認する。すると、(b)は「対象全体が客観的に論理化できる」という誤解となっており、その「誤解」が諸問題を引き起こしているとわかる(③段落)。本来明確に区別されるべき「人工物」と「自然」とが一括りにされ、「人工物」の特徴(客観的に論理化できる)を「自然」にも当てはめて考えようとするから、「自然の扱い方」で問題が生じるのである。以上から、(b)が正答。(a)・(c)・(e)は、いずれも「自然」の内容に合致するものになっており、不適。(d)は、「生と死」という言葉(「人工物」の性質を述べている部分ではあるが、限定的な話題となっており、適当ではない)。

2 傍線B直前の「ところが」に着目する。前段落(⑤段落)では、「自然物」について「相手がいかに変化しようとも、名前が変化しない」という説明と例が示された。それに対し、「ところが」で繋いで「人工物」の説明がなされるのが、傍線Bを含む段落である。当然、内容は「人工物は名前が変化しない」という内容となるはずである。少し後まで読み進めると、⑧段落に「人工物なら、状況が変われば『別なもの』になつてもいいのである。」という文が見つかる。

傍線Bはその具体例で、普段筆者が「灰皿」という名前で使っているガラス製の器が、他の使い方をするれば「皿」「凶器」「ガラスの破片」という名前で呼ばれる可能性があるということを言っている。

同じ建物であっても、学校の生徒たちが体育の授業で使えば「体育館」と呼ばれるものが、災害時に地域住民が過ぐす場所として使えば「避難所」と呼ばれるという(c)が正答。(a)・(e)は、使う人が違えば名前が変わるという例。(b)は、対象となる人工物の性質が変化している(使用済み↓新品)のために名前が変わっている例。(d)は、当せん番号の発表の前後で性質や価値が変わり、「宝くじ」から「紙くず」に変わっているという例。

3 空欄aが含まれる段落の冒頭にある「すなわち」に着目する。「すなわち」は、前に述べた事柄を別の言葉で説明し直すときに用いる表現。ここでの「前に述べた事柄」とは、問2で見てきたように、「人工物は『名前』が変わる」ということ。その「名前」はどのように決まっていたか(「命名されていたか」と言えば、「煙草の灰を貯め置く」「果物を載せる」「人を傷つける」などといった、「はたらき」によってであった。正答は(b)。

4 「読み切れない」をどう解釈するかがポイント。「() 切る」は、動作の完遂を示す表現。傍線Cではそれに可能な意味が付加され、さらに否定の形を取っているので、「完全には～できない」という内容となる。よって、「自然は完全には読み切れない」と同内容を含む文を、指示通り③段落から探す。

また、問1の解説でも触れたように、文章冒頭の議論は「人工物」と「自然」との対比で展開されている。前者は作成者の意図や論理を含み、客観的・論理的に理解が及ぶ。後者は、対比の構造からその反対だと考えられる。すなわち、「自然」は、人間の意図や論理が含まれず、客観的・論理的に理解が及ばない(部分がある)。ここまでを踏まえれば、③段落の3文目「自然現象は、部分的にしか『客観的』『論理的』には理解できない。」が該当するとわかる。正答は(b)。

5 空欄bを含む文の2文後が、「つまり、主客は人間対自然から、自分対他人に移行したのである。」となっている。「つまり」は問3で見た「すなわち」と同様、前に説明された内容を換言する際に用いる。⑨段落以降で述べられてきた「科学」の変質、とりわけ「主客」の変化についてまとめられているのが、空欄bを含む文と、それを換言した「つまり、主客は人間対自然から、自分対他人に移行したのである。」である。かつての科学は、主体である「人間」が「自然に問う」ものだった。それに対して現代(の日本)の科学は、主体である「自分」が「他人に問う」ものになったというのが筆者の考え。正答は(b)。

6 問5で見てきた「主客の変化」を受けて、「主体||自分、客体||他人」という関係性で捉えられるようになった「科学」の弊害が、⑮段落で述べられている。空欄cを含む文は、「だから、『c]人間性』に関する議論ではなく、単なる自他の相違に関する議論になってしまう。」となっている。「ではなく」を挟んでの対比となっており、「ではなく」の前がかつての「科学」、後ろが現代の「科学」に該当する。よって、空欄cには、「単なる自他の相違に関する議論」とは反対の性質の語句が入ると考えられる。

⑮段落では、現代の「科学」に関しての「単なる自他の相違に関する議論」は「単なる」「矮小化」「狭い」などの言葉で説明されており、空欄cには「広く」「全ての」という意味合いを含む語がふさわしいと考える。よって、(c)が正答。なお、「普遍」とは「全てに共通する」という意味で、「普遍」も「遍」も、「あまねく」という読み方をし、同じ意味を持つ。

7 選択肢を見ると、いずれも(1)「●●」という問題点(事象)が生じたのは、(2)「▲▲」ではなくて、(3)「■■■■」(だ)からである。」という構造になっているのがわかる。筆者がここで何を問題とし、何を否定し、どう主張しているかを考えることになる。

傍線D冒頭の「おそらくそうではなくて」に続くのは、⑩段落の1文目「多くの人は…見なししている。」への筆者の反論と主張。現代の自然科学において、⑮段落の後半で例示されたような「狭い」人間性の問題」が持ち出されるようになったが、その原因がどこにあるのかというのが焦点。世間の人々は「科学が進歩しすぎたから」と考えているのに対し、筆者は傍線Dで「脳化社会」に原因を求めている。

「脳化社会」という表現は、⑫段落に初めて登場する。人工物とは人間が作ったものであり、脳の産物である(⑮段落)。そのような人工物に溢れかえった社会を、筆者は「脳化社会」と呼んでいる。現代社会が「脳化社会」になったことで科学の変質が起こったという流れは、問5・問6で確認した通り。

(1)自然科学に「人間性」の問題が持ち込まれるようになったが、その原因は、(2)「科学の進歩」ではなく、(3)「脳化社会」(自然を排し、人工物ばかりになった社会)にあるとし、「脳化社会」の特徴を述べている(b)が正答。(a)・(c)・(d)・(e)は、(1)・(2)・(3)の関係が入れ替わっていたり、文中の他の語句に置き換わったりしており、自然科学の変質や、⑯段落における因果関係が正確に述べられた文となっていない。

8

(a) 「自然崇拜の念」の話題は本文に見られない。

(b) ②段落や③段落で述べられていた、『人工物』と『自然』とを混同するから諸問題が生じる」という筆者の考えに合致しない。

(c) ⑨段落以降で「自然」科学から「人工」科学への変質は述べられているが、それを「進歩」と捉える論調は見られない。

(d) 「自然科学が『自然』を失った」はⅢに、「現代の日本人が自然と個人的に対峙しなくなってきた」はⅣにそれぞれ記述があり、筆者の考えに合致している。

(e) 「完全な人工社会の中で生きるべき」という主張は本文に見られない。
正答は(d)。